

# Geschäft の語源について

Über den Ursprung des Wortes "Geschäft"

鹿見嶋 繁雄

桐蔭横浜大学法学部

2007年9月15日 受理

## 1. 現代ドイツ語 Geschäft は以下の意味である<sup>(1)</sup>。

### 1. 課題、義務 (Aufgabe, Obligkeit)

ich habe ein wichtiges G. zu tun.

「わたしはある重大な課題を片付けなければならない。」

### 2. 利益を目指す商人の行為、事業 (kaufmännische, auf Gewinn gerichtete Tätigkeit, Unternehmung)

die Geschäfte gehen gut. 「商売はうまくいっている。」

### 3. 商人の事業による利益 ein gutes G. machen 「売り上げがよい。」

### 4. 商人または工業のたいていは私的な事業

ein eigenes G. anfangen 「自分で商売を始める。」

### 5. 店舗 die Geschäfte öffnen um neun Uhr. 「お店は9時に開店する。」

抽象化された1. 「課題、義務」以外は「商会、店、売り上げ」という具体的な場所・行為・貨幣を指し示している。Geschäft と同系列の語彙は、以下のようである<sup>(2)</sup>。

#### [商売、取引]

das Geschäft [commerce, business]: 商人の個人的事業としての商業、またその結果。

das Gewerbe [trade]: あちこち駆け回って利益、生計を得るための職業としての仕事、とくに手工業的な商売・家業。狭義では商業に対する工業のこと。

der Handel [trade, commerce]: 売買によって品物が手から手へ移ること、取引、交易。

#### [商店、店]

das Geschäft [shop, store]: 商取引・事業の意味から、その仕事をする営業場所としての商店、商会の意味に用いられる。

die Handlung [shop]: 小売店のことであるが、とくに Gemüse- 「八百屋」 Holz- 「材木屋」 Kohl- 「石炭屋」 Buch- 「木屋」 Blumen- 「花屋」 のように他の名詞と

---

Shigeo Kagoshima; Department of Law, Faculty of Law, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane, Aobaku, Yokohama 225-8502

組み合わされて用いられるのが普通である。

der Laden [shop,store] : 店、店舗、商品の売り場、建物の中にある売店。

ドイツ語と英語を比較すると、shop,store はもっぱら「商店」に限定されているのに対してドイツ語 Geschäft は「商店」だけでなく、「商取引」へと意味が拡大されている。

語源辞典では次のように書かれている<sup>(3)</sup>。

Duden: 中高ドイツ語 *gescheft* [e] 「仕事」(Beschäftigung, Arbeit) 「(心にかかる大切な) 事柄、用事」(Angelegenheit) 「指示、指令」(Anordnung, Befehl) 「遺言」(Testament)、「申し合わせ、協定」(Abmachung) 「契約」(Vertrag)。

弱変化動詞 *schaffen* 「(困難なことを) 行う」の名詞化で、現代ドイツ語 *Geschäft* は最も重要な商業用語になった。

Kluge: ゴート語 *ga-skafts* 古期英語 (ge)sceaft 古ザクセン語・古高ドイツ語 *gaskaft* (ゴート語 *ga-skafts*<sup>(4)</sup> (女性 i 変化) は動詞的抽象名詞、歯音の接尾辞 -t(b,d) は強変化から作ることができる。)

Duden は弱変化 *schaffen* 「(仕事・目標などを一定期間内に) 成し遂げる」Kluge は、強変化の *schaffen* 「(新しいものを) 創り出す」から由来すると、対立している。実際の出典で語源辞典の正否をみてみよう。

## 2. 出典の比較

女性: *gescheft* [e] ,*ge-schaft* pl. *geschefte*

中高ドイツ語 *Parzival*<sup>(5)</sup> 817, 25 ~ 27

von wazzer boume sint gesaft. Wazzer früht al die geschaft(Geschöpfe), der man für créatiur giht.

水は樹液となって木にあふれる。水は生き物と呼ばれている万物に実を結ばれる。

中高ドイツ語 *Tristan*<sup>(6)</sup> 4070

Sîn geschepfede diu was hêrlîch. 彼の容貌が立派であったから、

中高ドイツ語 *Willehalm*<sup>(7)</sup> I,3

Ane valsch du reiner, du drî unt doch einer, schepfære über alle geschaft,

おお、過ちよ、汝清き者、三位であり一つのもの、あらゆる生き物の創造者、

中性: *gescheffede*, *geschepferde*

中高ドイツ語 *Tristan* 17275

ir geschepfede unde ir pflege was niht anders wan daz si gezam und inze muote rehte kam. 彼らは常に、自分たちの気に入りに、心になうことしかなかった。

中高ドイツ語の女性・中性はともに、なぜ現代語で商業用語として用いられたのか不明。「被

造物」「姿かたち」「こと」という抽象概念が、具体的な「商売・取引・商店」に限定された、と語源辞典の編集者は考えているのか？ Kluge が挙げている古高ドイツ語・ゴート語の用法も、中高ドイツ語と形態・音韻的に遡れる語彙をあてている。

ゴート語<sup>(8)</sup> マルコによる福音書 13,19

wairþand auk þai dagas jainai aglo swaleika, swe was swaleika fram anastodeinai gaskftais (ラテン語訳 creaturae) boei gaskop guþ, und hita, jah ni wairþiþ.

それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦悩が来るからである。

古高ドイツ語<sup>(9)</sup> Tatian 242,2 (マルコによる福音書 16,15)

Gét in alla ueraikt, praedigot euangelium allera giscéfti inti leret alle thióta,

現代ドイツ語

Gehet hin in alle Welt und predigt das Evangelium aller Kreatur und (マタイによる福音書 28,19) lehret sie halten alles.

「全世界へ行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。そしてすべての民をわたしの弟子にしなさい」

ゴート語・古高ドイツ語の例からも、Geschäft は、英語 shop のように具体的なモノに繋がらない。ドイツ語 Geschäft と英語 shop は形態は相似しているが、由来が異なっているようである<sup>(10)</sup>。

「古期フランス語、アングロ・ノルマン語 (11～14C まで英国で用いられたフランス語) eschoppe, 現代フランス語 échoppe, 中低ドイツ語 schoppe は古期英語 (7C～1100) sc(e)oppa と対応し、ラテン語訳聖書 (vulgata) に一例、出典がある」という。

ラテン語 ルカによる福音書 21,1

Repiciens autem vidit eos, qui mittebant munera sua in gazophylacium(sc(e)oppa),divites.

現代ドイツ語

Er sah aber auf und schaute die Reichen, wie sie ihre Opfer einlegen in den Gotteskasten.  
イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。 6

この sc(e)oppa はラテン語 cupa 「大樽、桶」が語源であろう。ラテン語の [k] はフランス語・英語で [ʃ] となる。(ラテン語 caesar [kaesar] → フランス語 César [sezar], 英語 Caesar [sɪːzær])

ラテン語 cupa 「大樽、桶」は現代ドイツ語 Schoppen 「シヨッペン (ビール・ワインなどの液量単位: 1/2 または 1/4 リットル)」に繋がる単語で、Onions が指摘している古高ドイツ語 scopf 「玄関、入り口の間」現代ドイツ語 Schopf 「(南部/スイス) (差し掛けの) 屋根、納屋」古高ドイツ語 scaf 「性状、秩序」に直接繋がるのではなく、「樽売りをする所」が本来の意味であろう。

### 3. 「商売」を表すことば

Geschäftの本質は、モノの売り買いであって、古層において「汲む」「妊娠する」「創造する」を意味する *schaffen*<sup>(11)</sup> とは別の系統のことばであらねばならない。

ゲルマン人にとって売り買いとは、どんなものであったのか、このことを知らせてくれるのは、タキトゥス『ゲルマニア』<sup>(12)</sup> 「24 社交・遊楽」の章である。

「彼らは賭博、——まことに不思議なことではあるが——彼らはこの賭博を、酔っていないときにも、あたかも真摯な仕事であるかのように行い、しかもすべてを失った場合、最終最後の一擲に、みずからの自由、みずからの身柄を賭けても争うほどの、勝負に対する無謀さである。負ければ、進んで他人の奴隷となり、たとえ自分が [勝った者より] より若く、より力強くても、身の束縛をうけ、売買に供されるのを耐え忍ぶ。蔑視すべき事柄における彼らの頑固さは、まさにかくのごとく、しかも彼らみずからは、これを「義」*fides* と呼ぶのである。この事情による奴隷は、勝ったものも、またみずから、その勝利の心苦しきからまぬがれるために、取引を通じて売り放してしまう。」

ここでいう奴隷はローマ帝国内における奴隷とは異なり、同書 25 「奴隷」にあるように、ゲルマン人の中では、借地小作人程度の隷属だったようである。重要なことは、ゲルマン人にとって売買の対象がモノではなく、人であり、賭けるのはモノであり、貨幣ではなかったことであろう。同書 5 「ゲルマニアの地貌・経済」では、この時代 (ADIC) においては「モノの流通は物々交換であって、日常の安価なものを購うにより価値の低い銀貨を受け取るのは、われわれにもっとも近く住んでいる者たちだけ」であった。

「売る」を表す現代ドイツ語 *verkaufen* は、*kaufen* 「買う」の二次的形態であり、*kaufen* は「売買」を意味するラテン語 *caupo* 「宿屋・飲食店の主人・商人」を借用したゴート語 *kaupon* 「取引する」から発している。ドイツ語とは異なり英語は「売る」*sell* と「買う」*buy* と異なる語彙を用いている。形態的に *sell* はゴート語 *saljan*, *buy* は *bugjan* に遡ることができる。

#### 3-1 *saljan*

*saljan* には意味が二つある。①一つは「犠牲を捧げる、取る」*opfern, nehmen*、②もう一つは「とどまる、宿泊する」*bleiben, herbergen* である。

##### ① *opfern, nehmen*

ゴート語 マルコによる福音書 14,12

*jah þamma frumistin daga aywme, þan paska* (ラテン語 *pasha*) *salidedun* (ラテン語 *immolabant*), *qebun du imma þai siponjos is:*

現代ドイツ語

und am ersten Tage der ungesäuerten Brote, da man das Osterlamm opferte, sprachen seine Jungen zu ihm:

除酵祭の第一日、すなわち過越しの子羊をほふる日に、弟子たちがイエスに尋ねた：

ゴート語 ヨハネによる福音書 16,2

Us gaqumþim dreiband izwis; akei qimiþ hveila, ei sahvazuh izei usqimiþ izwis,  
buggkeiþ hunsla (ラテン語 obsequium) saljan guda.

現代ドイツ語

Sie werden euch in den Bann tun. Ja, es kommt die Stunde, daß wer euch tötet, wird meinen, er tue Gott einen Dienst damit.

人びとはあなたがたを会堂から追放するだろう。しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る。

hunsla saljan はラテン語 obsequium se praestare 「恩寵の実を示す」でゴート語 hunsl は古期英語 hūsel(hūs) 現代英語 housel, 現代ドイツ語 Hostie 「ホスチア、供犠パン、晩餐、生贄」のことである。「奉仕する」と訳されているゴート語 hunsla saljan guda は、「(本来「犠牲獣」である) 神のホスチアをほふる」で、神に帰依しているの意。

## ② herbergen, bleiben

ゴート語 ルカによる福音書 9,4

jah in banei gard gagaiþ, þar salijþ (ラテン語 manete) jah þaþroh usgaggiþ.

現代ドイツ語

Und wenn ihr in ein Haus gehet, da bleibet, bis ihr von dannen weiterziehet.

どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい。

この saljan はラテン語 manete < maneō 「同じ所にとどまる、滞在する」を訳している。

① の saljan はラテン語 immolō 「犠牲式で生贄に聖なる挽き割りを振り掛ける」を訳している。「聖なる挽き割り」 mola salsa とは「大麦と塩を混ぜたもの」である。

② の saljan は貨幣の代わりとして塩を用いていた時代の反映なのであろうか？ ゲルマン人と塩との係わりは詳しく分かっていない。しかし、英語の salary の語源はラテン語 salārius 「兵士が塩を買うための金」であるので可能性はある。

Stäubli<sup>(13)</sup> の Salz の項には次のようにある。

「すでに、ギリシア人とローマ人は『聖なる』海水を、海水が無い場合は、塩水を聖別と贖罪のために用いた。塩はあばれる生贄のために用いた。塩と塩水に彼らは保存力だけではなく、清める力を認めていた。この風習をユダヤ人・オリエント人も取り入れキリスト教においても塩の力は聖別と贖罪のシンボルとして用いられる。タキトゥスはゲルマン人の信仰の項で、塩泉は天国の近くにあり、そこ以外どこにおいても死者の願いは神によって聞き入れられない…」とある。塩が生贄に使われる理由は納得できるが、後半のタキトゥスの記述には該当箇所はない。

一方、生活に不可欠な塩は、農業に従事する民族の豚の飼育と係わると Schrader<sup>(14)</sup> は述べている。

「われわれの Salz (塩) (ゴート語 salt, 古高ドイツ語 salz) = ラテン語 sāl, ギリシア語 hals, 古アイルランド語 salann, 古ブルガリア語 solb, ラトビア語 sals, アルメニア語 at は、大半の農業語の比較対応と同じようにヨーロッパに限られている。それというもの、当然の生理学的な

理由から、専ら動物を食料として生活している牧畜民は塩の必要を感じないが、菜食がより中心になっているところでは、塩はますます欠くことのできないものになるからである。これと関係した特徴的な傾向として、さらに次のような事情がある。豚の飼育は、いたるところで純粹の牧畜よりもむしろ農業に結びついている。そして先史学、歴史学いずれの証拠によっても、ヨーロッパの印欧語族の場合には、その飼育はるかかなたの時代にまでさかのぼって跡づけられるのに、インド人とイラン系のスキタイ人については、彼らは飼いならされた豚を知らなかったとはっきり伝えられている。」

この塩についての説明は説得力がない。インド・イラン系の国で豚を食べないことは、ヨーロッパにおける「豚の飼育」→「定住して農業を営む」→「菜食」→「塩が不可欠であること」と因果関係があると、単純化できるのだろうか？ インド・イラン系のことばでは *sāl* 系と異なる語彙を使用しているにすぎないのではないか？ むしろ交易の必要性からラテン語の *sāl* がローマ帝国領のヨーロッパ地域に共通語として用いられ、各民族固有の語彙を駆逐したと考える方が現実に近いのではないだろうか？

### 3-2 bugjan

ゴート語 ヨハネによる福音書 6,5

Þaruh ushof augona Iesus jah gaumida þammei manageins filu iddja du imma,qabuh du Filippau; hvaþro bugjan (ラテン語 *ememus*) hlaibans, ei matjaina þai?

現代ドイツ語

Da hob Jesus seine Augen auf und sieht, daß viel Volks zu ihm kommt, und spricht zu Philippus : wo kaufen wir Brot, daß diese essen?

イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われた。

ゴート語 ヨハネによる福音書 12,5

duhve þata balsm ni frabauht (ラテン語 *vaeniit* > *vēneō* の完了「売られる」)was in -t-skatte jah fradailiþ wesi þarbam?

現代ドイツ語

Warum ist diese Salbe nicht verkauft um dreihundert Silbergroschen und den Armen gegeben?

*bugjan* と *fra-bugjan* は、現代ドイツ語の *kaufen*—*ver-kaufen* と同じ造語法で、貨幣による売買は、ゴート人にとって視点は「買う」に置かれている。*kaufen* の古層である古高ドイツ語 *coufen* は、ラテン語 *vēneō* 「売られる」という中動態を「買う」という能動態の視点から表現している。この表現は現代ドイツ語にも引き継がれている。

ラテン語 マタイによる福音書 10,29

Nonne duo passerēs asse veneunt?

古高ドイツ語 Tatian 44,20

Eno nú coufit man zuene sparōn mit scazzu?

現代ドイツ語

Kauft man nicht zwei Sperlinge um einen Pfennig?

二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか？

#### 4. skaftjan と selen

ゴート語 skaftjan 「用意する」(in Bereitschaft setzen), sik skaftjan 「用意、手配する」(sich anschicken), 古高ドイツ語 selen 「手渡す」(hingeben)。この二つの単語は 一見、売買と直接関わりがなさそうであるが、現代英語 sell の語源である古高ドイツ語 selen とゴート語 skaftjan が対応している例がある。

ゴート語 ヨハネによる福音書 12,4

qaþ þan ains þize siponje is, Judas Seimonis sa Iskariotes, izei skaftida (skaftjan の過去)  
sik du galewjan ina:

古高ドイツ語 Tatian 138,2

Tho quad ein fon sinen iungiron, Iudas Scarioth, ther inan uuas salenti (selen の現在分詞)  
:

ラテン語

Dixit ergo unus ex discipulis eius, Iudas Iscariotes qui erat eum traditurus (tradō「手渡す」  
の未来分詞「手渡さんとする」):

現代ドイツ語

Da sprach seiner Jünger einer, Judas Ischarioth, der ihn hernach verriet.  
弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。

Kluge<sup>(16)</sup>によると、「Geschäftの前史は中高ドイツ語 gescheft(e)で始まる。gescheft(e)は弱変化動詞 schaffen を抽象化した名詞（「人がしなければならないこと」）から発展する。国事(Staatsgeschäft)への限定は、18Cのゲートに由来し、商業用語としての用法は15Cに始まり(1417 :A.Schirmer Wörterbuch der deutschen Kaufmannsprache 73)、19Cになって初めて一般に広まった」とあるが、ゴート語(380年)の skaftjan や古高ドイツ語 Tatian (830年) selen の中に「売る」の原形を見ることができなであろうか？ゴート語の文章 izei skaftida sik du galewjan ina は、skaftjan 以外を現代ドイツ語に直訳すると、der ihn hingeben werdend+sich + skaftjan の過去、となる。ラテン語も現代ドイツ語に直訳すると、der ihn hingeben werdend war となり、ゴート語では「自分をして彼(イエス)を手渡す skaftjan をした」と表現している。この skaftjan の部分を、無理にラテン語の文章に当て嵌めると、sik skaftjan はゴート語辞典にあるように「用意、手配する」(sich anschicken) という意味であらねばならない。しかし、この訳語には、合理的な理由があるわけではない。しかるにラテン語は、単に「手渡さんとする」としか書かれていない。この点、古高ドイツ語 Tatian はラテン語の構文を忠実に訳していて、現代ドイツ語に直訳すると、der ihn hingebend war となる。

すなわちゴート語 galewjan と古高ドイツ語 Tatian の selen が「手渡す」なのか、それともゴート語 sik skaftjan zu galewjan と古高ドイツ語の selen が「手渡す」なのか、という問題である。

原典のギリシアでは「未来」を用いている。

Ἰωάννης XII 4

Ἀλέφει οὖν εἰς ἐκ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ, Ἰούδας Σίμωνος ὁ Ἰσκαριῶνος ὁ μέλλων

αὐτόν παραδίδονα.

μέλλωνはμέλλωの現在分詞。μέλλω<sup>(16)</sup>は「・・するつもり」(to think of doing,intend to do,to be about to do)の意であり、「未来」の書き換え<sup>(17)</sup>であるという。

ゴートは、このμέλλωを sik skaftjan で訳している。

結論としては、ゴート語はギリシア語に忠実であるが、ラテン語と表現が異なっていると考えられる。lewjan は他の文例をみると、「裏切る」verraten であって。「手渡す」hingeben ではない。

ゴート語 マルコによる福音書 14,42

ureisiþ, gaggam! Sai, sa lewjands mik atnevhida.

現代ドイツ語

Stehet auf, laß uns gehen! Siehe, der mich verrät, ist nahe.

立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。

ゴート語は「裏切ろうと自らを skaftjan した」と表現している。古高ドイツ語 selen とゴート語 sik skaftjan は同じ意味でなければならない。ゴート語 saljan が上述のように「犠牲を捧げる」を意味するのであるならば、ゴート語 sik skaftjan は「自分を犠牲に捧げる」となるであろう。またゴート語 saljan のもう一つの意味「留まる、宿泊する」の sal が「塩」であって、「金銭を支払って留まる」を意味するなら、sik skaftjan は「自分を売って」の意味でなければならない。

十二使徒の一人であり、会計をごまかし、イエスを祭司長に「売った」ユダは、イエスが磔によって殺されたのを見て、首を括って死ぬ。ゲルマン人にとって売買は人である、という『ゲルマニア』の記述にあるように、ユダは自分を売った。

英語 shop が「モノの名前」「樽」(ラテン語 cupa) から派生し、「モノを売る場所」という「部分を表す」ことば以上に派生しなかったのに対して、ドイツ語 Geschäft は、その古層において「売る」という行為の「種類をあらわす」ことばから派生したので、「部分」だけでなく、義務・国事・容貌など「コト」に派生していったと、考えられる。

#### 注

(1) Klappenbach,R.: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache ( Berlin 1981)

(2) 中條宗助「ドイツ語類語辞典」(東京 2000)

(3) Duden: Herkunftswörterbuch( Mannheim 1963)

(4) Braune/Ebbinghaus: Gotische Grammatik ( Tübingen 1973)

(5) Parzval: Lachmann,K. ( Berlin 1998 )

(6) Tristan: Marold,K. (Berlin 1977 )

(7) Willehalm:Schräder,W.J. ( Darmstadt 1973)

(8) Streitberg,W: Die gotische Bibel ( Heidelberg 1971)

(9) Sievers,E.:Tatian ( Paderborn 1966)

(10) Onions,C.T.: English Etymology ( Oxford 1996 )

(11)『桐蔭論叢』第 15 号 「ドイツ語の単語 sc(h)af(t) について」P.76

(12)タキトウス『ゲルマニア』(泉井久之助 訳 東京 1987)

(13) Bächtold-Stäubli,H.: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens (Berlin 1987)

(14) Schrader,O.: Die Indogermanen (Heidelberg 1935) (訳書『インド・ヨーロッパ語族』P.29 風間喜代三



(東京 1977))

(15)Kluge,F.: ibid

(16)Liddell/Scott: Greek-English Lexicon ( Oxford 1975)

(17)Rienecker,F. : Sprachlicher Schlüssel zum Griechischen Neuen Testament(Gießen-Basel 1974)